

【教育】フラッグフットボールとタグラグビー 指導要領解説書に掲載

2008.7.30 08:29

小人数学級にマッチ

平成23年度から完全実施される小学校新学習指導要領解説書の体育に、フラッグフットボールとタグラグビーが例示された。ラグビー・アメリカンフットボール系競技が小学校の指導要領解説書に掲載されたのは初。関係者の普及への努力と、少子化の中、運動量が過重にならず、小人数学級でも授業が進めやすいことが要因のようだ。

フラッグフットボールは1チーム5人、アメリカンフットボールと同様、作戦をたてながら決まった回数で陣地を奪い、タッチダウンなどで得点を競う。

タグラグビーも1チーム5人でルールはラグビーとほぼ同じ。4回パスする間にトライできないと攻守交代となる。いずれもタックルなど危険な接触プレーを禁止し、代わりに腰につけた短冊状のテープ(フラッグ、タグ)を奪うため子供や女性でも安全にプレーできる。

「フラッグ」はここ10年で人気が急速に高まった。平成10年にアメリカンフットボールの米プロリーグの日本組織、NFLジャパンが普及活動を始めた当時、フラッグを実施していたのは40校。昨年は3082の小中学校が授業や部活で採用した。学校での評価が高まり、筑波大が科学的に教育への効用を解明するなど関係者の努力、働きかけもあって、解説書に掲載される流れができた。

「多様な個性を持った生徒が学校にいる中、球技という集団活動で、運動能力が高なくても“役割”を果たすことで自分の活躍する場を得ることができる」とNFLジャパンの町田光代表。走る、泳ぐ、投げるなどでスターになれなくても、分業制で自分の能力を生かし、貢献できる。集団として達成感を味わうこともでき、コミュニケーション能力も高まる、とゲームの効用を話す。

両ゲームともフラッグ・タグが取られるとプレーが止まり、作戦タイムとなる。運動量が多過ぎないことも、小人数クラスが多い現在の学校にマッチしたようだ。



学習指導要領解説書

学校がカリキュラムを編制する際の大綱的基準である学習指導要領の改定に合わせて文部科学省が編集し、小中高校の教科ごとに指導要領の意味の詳細を補足説明するもの。指導要領と違い法的拘束力はないが、実際の教科書編集は解説書に準じて行われている。